

「...え？」

「聞こえなかった？ 今ここで、クラスの皆が見ている前でしなさいって言ってるのよ」

担任の先生が冷たくそう言い放つ。
その無慈悲な発言に、佑樹の顔は絶望に満ちていった。

遡ること数分前...

1時間目のチャイムが鳴る少し前、教室内はざわついていた。
ぎょう虫検査のテープ提出のとき...この空気感が佑樹はどうにも居心地悪かった。

ぎょう虫検査。肛門にテープを貼るというとてもなく恥ずかしいイベント。
親に手伝ってもらおうという屈辱、肛門に貼ったテープを学校に持っていくという屈辱。
そんな羞恥プレイ、佑樹には耐えられるものではなかった。

「朝やったけどさーダルいよね、これ」
「お父さんに手伝ってもらったんだけどマジで恥ずかしかった」
「うちもうちも。なんかウキウキな感じで『やってあげようか？』って言われてキモかった」
「うわー...」

あちこちでそんな会話が飛び交う。

親にぎょう虫検査を手伝ってもらうなんてどう考えても恥ずかしすぎる。
そう感じていた佑樹は結局、親に検査の存在を伝えられず、そのまま今日を迎えてしまったのだ。

「ねえ佑樹、ちゃんとお母さんにしてもらった？ ギョーチュー検査」

「は...？ 別に関係ね一だろ...」

前の席から美羽が話しかけてきた。いつものように少し高飛車な調子がなんとなく鼻につく佑樹。
『お母さんにしてもらった？』と人を小馬鹿にする様子にもムツとくる。

「お前こそパパにしてもらったのかよ？ ケツの穴にべったん」

「...お...女の子にそんなこと聞くと最ッ低なんだけど！」

「そっちから聞いてきたんだろ」

「保健委員としてしっかりとやってきたかどうかを聞く義務があるんですー！！」

「へー、委員の仕事まともにやってるとこ見たことないけどな」

佑樹と美羽は幼稚園からの幼馴染だが犬猿の仲であり、何かと喧嘩をすることが多かった。
今日も朝からいつものように軽い口喧嘩をする2人。

「はい、じゃあみんな、静かにしなさい」

ホームルームの開始を告げる担任の先生の声が響き渡る。
自分の意見は絶対に通す、威圧的で独裁者のような女の先生だ。
そんな先生を佑樹は「キツイ女」と嫌っており、内心ビビっていた。

教卓の上に回収ボックスを置く先生。

「さあ、今日はぎょう虫検査の提出日です。みんな忘れてないわよね？」

(...やべえ...どうしょ...)

テープを持ってきていない佑樹は焦っていた。
正直にテープを持って来ていないことを話すべきか...だが、正直に話したら大目玉を喰らうかも知れない。

結局、佑樹はただ黙って下を向いていることしかできなかった。

「これに自分の検査テープを入れていってちょうだい」

クラスメイトがそろそろと立ち上がり、順番にボックスへ検査テープを入れていく。その中には笑顔で友人同士の会話を続ける者もいれば、少し照れた表情で黙っている者もいる。

その様子を見ながら、佑樹は唾を飲み込み、ただ自分の席にしがみついていた。

佑樹を除く全員が提出を終え、教室に沈黙が訪れる。
先生はボックスの中を確認しながら、眉をひそめた。

「.....足りないわね」

静かな声が、凍りつくような威圧感を放つ。

「35人クラスなのに34枚しかないわ。今日の欠席者は0。つまり、1人だけ提出していない者がいます。正直に手を挙げなさい」

教室全体がピリついた空気に包まれる。
佑樹はこの空気に手を挙げる勇気はなかった。

「...誰も手を挙げないのね。じゃあ私が名前を言いましょうか？」

「...」

「自分で正直に手を挙げないと後悔することになるわよ？」

先生の言葉で冷や汗が額を伝う。

「佑樹くん、あなたよ。立って前に来なさい」

名指しされると同時に、クラス全員の視線が佑樹に集中する。
周りの視線を浴びながら佑樹はゆっくりと立ち上がり、恐る恐る先生がいる教卓の方に向かった。

「提出は今日しかできないから必ず持ってくるようにって言ったわよね？」

「...はい」

「ところで、ちゃんとお尻に貼ったのかしら？」

「...いえ、貼ってません...」

「はい？ 忘れたっていうこと？」

「...はい...」

忘れていたわけではなかったが、咄嗟に嘘をつく佑樹。
『親に手伝ってもらうのが恥ずかしい』と正直に言うことが恥ずかしかったからだ。

「仕方ないわね...」

「すみません...」

「じゃあ、今、この場でお尻にテープ貼ってもらおうかしら」

「...え？」

佑樹は、一瞬、先生の言葉の意味を理解できなかった。

「聞こえなかった？ 今ここで、クラスの皆が見ている前でしなさいって言ってるのよ」

「.....意味が分かりません。なぜここでしないといけないのですか...」

「良いですか？ 提出は今日しかできないのに、あなたは忘れて来たの。あなた1人だけよ？ そして、提出しないなんて許されていないから、今からするしかないじゃないの」

「でも... それならトイレですれば...」

「...あのね、先生はさっき、『提出していない人は正直に手を挙げなさい』と言いました。しかし、あなたは挙げませんでした。嘘をついて誤魔化そうとしました。分かる？ つまりこれは、嘘をついた佑樹くんへの恥ずかしい罰でもあるのよ？」

「...」

滅茶苦茶な言い分だ。

確かに誤魔化そうとはしたが、それだけでクラスメイトが見ている前で、尻を出して、ぎょう虫検査しろと...？

その光景を思い浮かべ、佑樹の顔はみるみる青ざめていった。

親にすら見られたくない場所を、クラスメイト全員に晒す——明日からどんな顔をして学校に来れば良いんだ。

「それだけは嫌です...」

「あなたに拒否権があると思っているのかしら？」

「...本当に嫌です...」

「...そうやってぐずぐずと拒み続けるのなら今日の授業はずっと始まらないわよ。つまり、皆に迷惑をかけてしまうということが分かるかしら？」

威圧的な言い方をする先生に萎縮する佑樹。

教室でお尻を丸出しにしてぎょう虫検査テープを貼る——そんなこと、到底現実とは思えない。けれども、先生の目は本気だった。

「予備の検査テープがあるわ。これで貼るから教卓の上で四つん這いになりなさい」

「.....は？」

よりによって教卓の上で四つん這いという、最もお尻が良く見え、最も羞恥を煽るような姿勢を指示する先生の鬼畜ぶりに狼狽する佑樹。

「...なんでわざわざ教卓の上なんですか...？ テープを貼るだけならそんなことしなくてもできるはずです...」

「まだ分からないの？ただの検査じゃなくて恥ずかしい罰も兼ねてるって言ってるでしょ？」

「...いくらなんでも... 本気でやるんですか...？」

「当然よ。冗談を言ってるように見える？」

「...」

「早くしないと皆の授業時間がどんどん減っていくわね。ほら、皆迷惑そうな顔しているわ」

佑樹は恥ずかしさで後ろを振り返ることができなかった。

実際のところ、クラスメイトたちは迷惑そうにしていたわけではない。むしろ授業時間は潰れて欲しいとすら思っている。

先生と佑樹のやり取りを、ただ興味津々といった目で見守っているだけだった。
これから1人の同級生が教室でお尻を出し、お尻の穴を晒し、そのお尻の穴に検査テープを貼る——そんな非日常的で信じられないような光景を目撃するかもしれない。
その期待混じりの好奇心が、教室の空気を静かに歪めていく。

「さ、早く教卓の上に登って四つん這いになりなさい。どうせやるんだから、早めにやってしまった方が恥ずかしくないでしょう？」

「...」

「...このまま何時間もそうやって突っ立ってても、先生は構いませんよ？」

...

...

佑樹は固まったまま、およそ5分間沈黙が続いた。

...

空気に耐えられなくなった佑樹は観念したのか、漸く動き出す。

上履きを脱ぎ、隣の机に手をついてバランスを取りながら、ゆっくりと教卓に登る。
足元がふらつき、心臓の鼓動が耳まで響いてくるのが分かる。

姿勢を低くし、教卓の上で四つん這いになる...

クラスメイトたちの視線が佑樹のお尻へと集まる。教卓の上でお尻を突き出した同級生という、異様な光景を前に、皆それぞれの感情を抱いていた。

これから本当に尻を出すのか...と、慈悲の目で佑樹を眺める友人たち。
ズボンの上からだが、小ぶりなそのお尻のシルエットに思わず視線を奪われる女子。
恥ずかしそうに目をそらす者もいれば、状況を面白がるような者もある。反応はまちまちだった。

美羽は、複雑な気持ちで佑樹の姿を見つめていた。
まさかこんなことになるなんて...

普段は口喧嘩ばかりしている男子が、こうして屈辱的な姿を晒しているのを見て、心の奥底で清々しい気持ちが湧いてくる。それと同時に、幼い頃から唯一の幼馴染だった彼が、こんなにも恥ずかしい格好をしていることに、形容し難い感情に駆られていた。

それは単なる優越感や同情ではなく、もっと得体の知れない、何か....。

「.....佑樹.....」

美羽の視線は、教卓の上で四つん這いになっている佑樹のお尻から離れることができなかった。

「では美羽さん、こちらへ来なさい」

『...はえ?』

先生が突然美羽の名前を呼ぶと、美羽は動揺して間の抜けた声を漏らした。そしてそれは佑樹も同じだった。
教室全体が静まり返る中、呼ばれた美羽は困惑の表情を浮かべる。

「え.....私ですか...？」

「そうよ、早く」

美羽は、戸惑いながらも立ち上がり、周囲の視線を感じながら先生の近くへ歩み寄る。
教卓の後ろ、つまり、四つん這いで待機している佑樹のお尻の後ろで足を止めると、先生が軽く頷いて言った。

「では、佑樹くんのズボンとパンツを下ろして、お尻の穴に検査テープを貼りなさい」

「.....え？」

「.....は？」

その思いも寄らない言葉に更に動揺する2人。

「え...え...！？ ...私がですか...??」

「ええ、先生は今日ちょっと爪が長くてね。だから先生がしたら佑樹くんのお尻を傷つけちゃうかも知れないわ。それに、美羽さんは保健委員でしょう？」

「は？ガチで意味不明なんだけど...なんで美羽なんだよ...！」

「佑樹くん...先生に向かってなんですか、その態度は」

声を荒げて犯行するも、先生の普段出さない低くて凜々しい声に怖気付いてしまう。

「...クラスの...女子にされるのは嫌です...」

「自分の立場を分かってないようね... あなたがぎょう虫検査を忘れた上に、誤魔化そうしたからこうなったのよ？」

「...」

「また、そうやって固まっているつもり？ 今度はそのお尻を突き出した恥ずかしい格好のまま、ずっとそうしてれば良いわ」

「.....」

「...さっきも言ったけど、早めに終わらしてしまった方が恥ずかしくないわよ？」

...

もう佑樹には、為す術がなかった。

「...クソ.....やれよ...」

意を決したかのようにそう言う佑樹。

「ですって、美羽さん」

「え...で、でも...」

美羽はまだ戸惑ってる様子だった。

「.....さっさとやれよっ！」

羞恥心を隠すように怒鳴ってしまった佑樹だが、側から見れば間抜けそのものである。

「...良いんだよね...？ 本当にやるよ...脱がすよ.....」

佑樹のズボンに手を掛ける美羽。

(...ざけんなよ...マジでなんで美羽なんだよ...クソが...クソがクソがクソが...!!!)

普段喧嘩ばかりの幼馴染である美羽に尻を見られる...
そんな屈辱と羞恥に涙ぐんでしまう。

美羽は、もうどうにでもなれと言わんばかりにぎゅっと目を瞑った。

そして.....佑樹のズボンをパンツごと一気に引き下ろした。

————サンプルはここまでとなります————